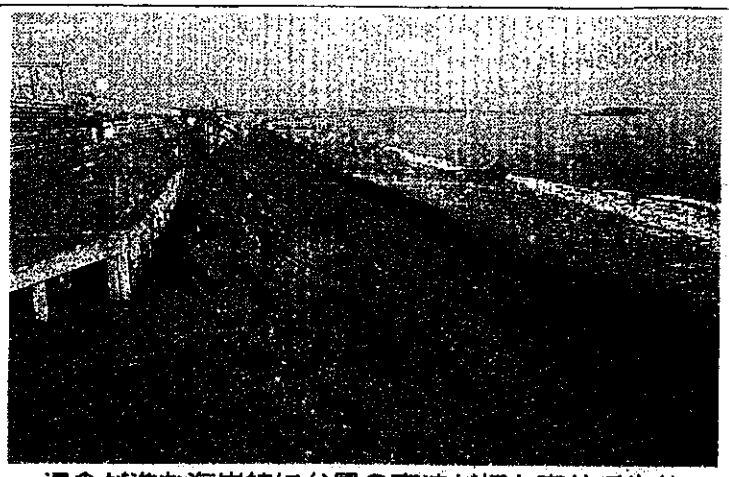
茅ケ崎海岸

抜本的な浸食対策を

市民団体 県に陳情書を提出

茅ケ崎市内で海岸の保全活動を続ける市民団体「ほのぼのビーチ実行委員会」（大坊裕委員長）など十五団体は十四日、抜本的な海岸浸食対策などを求める陳情書を、一万千九百人分の署名を添えて県に提出した。

（大無田　龍一）

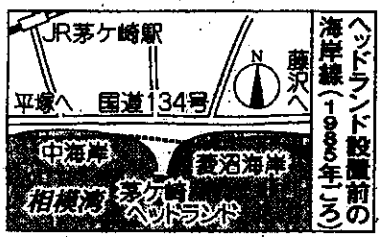


浸食が進む海岸線に台風の高波が打ち寄せて生じた「浜がけ」＝茅ケ崎市菱沼海岸

陳情書によると、「砂浜は水質浄化作用や生物多様性保全などの環境面と、高潮対策など防災面の重要性を兼ね備えている」とした上で、これまで行われてきた突堤などの構造物で海岸線を護岸する浸食対策について「浸食が進んだ個所にその都度、構造物を設置する対症療法」と指摘。相模川上流のダムや河口付近に堆積した土砂を海岸に供給する取り組みなど、抜本的な解決策を求めている。

さらに、湘南海岸一帯での保全活動の維持などを理由に、二〇〇四年度で閉鎖予定の県湘南なぎさ事務所（同市汐見台）の存続を訴えている。

陳情書を受け取った尾高暉重副知事は「海岸は県の宝。問題点を再確認し、要望の内容を検討していきたい」と話した。



湾と河川流域 一体の取り組みを

茅ケ崎海岸（全長四・八キロ）の浸食が止まらない。相模川からの土砂供給が減少したためとみられるが、県は一九七〇年代に問題が顕在化して以降、沖合に「ヘッドランド（人工岬）」を設置するなど対策に当たってきた。一部で成果を挙げる一方、浸食が加速した場所も。市民団体からは抜本的な対策を求める声が出ている。

湘南地域の海岸を管理する県湘南なぎさ事務所は、海岸浸食対策に約百四十四億円を投じ、八八年から海岸構造物の設置や外部から砂を補充する「養浜」に取り組んできた。九一年に中海岸と菱沼海岸の中間に完成したヘッドランド（長さ二百三十㍍）は、対策事業の象徴的な存在だ。海岸から沖合にT字形に突堤を築き、波にさらわれる砂の流出を防ぐ効果がある。

同事務所によると、ヘッドランド周辺の海岸は二〇〇三年度までに最大四十三㍍前進した。一方で、西側の中海岸は十二㍍、東側の菱沼海岸は二十五㍍後退した。後退した距離は、ヘッドランド設置前の十五年分よりも長い。

浸食の原因について、同事務所は「ヘッドランド設置が原因となっている可能性がある」と説明しながらも、「設置しなければ菱沼から中海岸までの一帯でさらに浸食が進んでいた」と理解を求める。

今年は浸食が進む海岸に相次ぐ台風の高波が迫った結果、菱沼海岸などでは高さ約三・五㍍の〝がけ〟が出現。展望台や遊歩道の直前まで迫っている。

同事務所は、浸食の進んだ中海岸に小型で海底の生態系や景観に配慮した「レンズ礁」を設置しようと研究を進めている。養浜と並行して砂浜を復元させたい考えだが、市民団体からは「また別の砂浜がやせ細るだけでは」という不安の声も聞かれる。

海岸浸食問題に詳しい財団法人土木研究センターなぎさ総合研究室の宇多高明室長は「相模ダムや相模川河口部、片瀬漁港付近などに堆積した土砂を循環させるシステムなど、相模湾と相模川流域が一体となった取り組みが必要」と強調している。

（大無田　龍一）

神奈川新聞 2004.12.15

署名・陳情書提出